

目的 親子関係の諸課題を生活縮図的に探究する方法として、“日常生活にひらかれた”心理劇の活用の可能性を探り、その方法論的な特性をいかした課題の考究を行う。今回は、親の役割体験に着目し、役割に規定されて孤立化する問題状況などを明らかにしながら、いつもの役割とは異なる“もう1つの役割体験”が親自身の生き方を豊かにし、日常の親子関係を活性化するのではないかという仮説をたて、理論的・技術的・実践的に探究する。

方法 1988～1993年度お茶大乳幼児集団研究会、児童集団研究会の親グループにおいて行われた心理劇の中から、A. 親の役割行為の可能性をひろげる心理劇、B. 親とは異なる役割を担う心理劇、C. 日常をこえる役割体験をする心理劇を取り上げ、フィールドワークによる実践資料をも参考にしながら、目的に応じた分析・考察を行う。

結果および考察 心理劇の状況技法～A. 生活縮図的な場面を設定して親の多様な役割行為の可能性を探る心理劇：【問題場面へのかかわり方】【親子の役割交換】【親の補助自我的な役割行為】その他。B. 家庭と社会の交差領域において親とは異なる役割を取る心理劇【“お母さん”の外出】【ある日—いろいろな役割体験】【“自分史”編集会議】その他。C. 日常を超える空想的な場面で新しい役割体験をする心理劇【春・夏・秋・冬の表演】【人生の輝きのとき】【新しい体験の旅】その他。

日常生活場面や心理劇の行演場面において、親がもう1つの新しい役割体験をすることは「発想の転換」「多面的なものの見方」「新鮮な発見・感動」「マンネリの打破」「ゆとりのあるかかわり方」などをもたらし、親子関係のダイナミックな展開の一助となる。